

自然災害と感染症流行の複合災害時における被害の様相 —1918年大町地震とスペイン風邪に関する新聞記事からの考察—

Some Aspects of Damage during Compound Disaster of Natural Disaster and Pandemic
- A Case Study of The 1918 Omachi Earthquake and The Spanish Flu -

○藤本 一雄¹, 田中 公博²
Kazuo FUJIMOTO¹ and Masahiro TANAKA²

¹ 千葉科学大学 危機管理システム学科

Department of Risk and Crisis Management System, Chiba Institute of Science

² 松本広域消防局(前 千葉科学大学 学生)

Matsumoto Regional Fire Bureau

In order to gain the image of damage situation during compound disaster of natural disaster and pandemic, we collected the newspaper articles of the Spanish flu which killed several hundreds of thousand of people in Japan from 1918 to 1920 and those of the Omachi earthquake (M6.5) which occurred on 11 November 1918 in the northwestern part of Nagano prefecture. We analyzed the articles of the *Shinano Mainichi Newspapers* for one year from 23 October 1918. The result indicates that staying at home (not evacuating to a shelter) is one of the most effective measures against compound disaster of earthquake disaster and pandemic in future.

Keywords : compound disaster, the 1918 Omachi earthquake, the Spanish flu, pandemic, newspaper article

1. はじめに

東日本大震災では、地震・津波災害と原子力発電所事故の複合災害への想定が不十分であったと言われている。今後、複合災害への備えを考えるには、まず災害とそれによる被災イメージを持つことから始まるとの指摘がある¹⁾。過去の複合災害としては、1707年の宝永地震(M8.6)の49日後に発生した富士山の宝永噴火、1854年の安政東海地震(M8.4)の32時間後に発生した安政南海地震(M8.4)など、自然災害同士の複合災害が有名である。

自然災害のほかに、多数の国民が生命を喪失する危険性は、感染症の大流行によっても予想される。大規模自然災害が発生すると二次災害としての感染症流行の危険性が指摘されることが多い²⁾。しかし、自然災害後に発生する感染症の問題だけでなく、SARSや新型インフルエンザなど感染症そのものを災害として捉える視点が必要との指摘³⁾もある。このことは、新型インフルエンザの被害想定⁴⁾において、全人口の25%が罹患すると想定した場合、入院患者数の上限は約200万人、死亡者数の上限は約64万人になるとの推計からも明らかであろう。

日本では、古代から疱瘡(天然痘)や麻疹などの感染症が猛威をふるっていた。また、江戸時代の後半には海外からコレラが侵入し、明治時代を通して数万~十万人の犠牲者を生じる大流行を繰り返した。1918年~1920年には、世界的に大流行したスペインインフルエンザ(日本では通称「スペイン風邪」と呼ばれる)により、日本だけで数十万人の死者を生じた。このスペイン風邪が猛威を振るう中、1918年11月11日に長野県で大町地震(M6.5)が発生した。感染症の流行と地震災害の発生が同時期に起こることは稀な事象ではあるものの、東日本大震災の教訓を踏まえれば、今後の国や自治体の危機管理として、自然災害と感染症流行の複合災害を想定しておくことも必

要であろう。その第一歩として、今後、自然災害と感染症流行の複合災害による被災イメージを持つためには、スペイン風邪の流行中に発生した大町地震の被災地における被害の様相を知ることは意義があるものと考えられる。

そこで、本研究では、自然災害と感染症流行の複合災害時の被災イメージを得るため、スペイン風邪と大町地震を対象として、当時の新聞記事を用いて、複合災害時の被災地における被害の様相を示すことを目的とする。

2. 自然災害と感染症流行との複合災害の事例

日本における感染症の大流行と自然災害との複合災害の事例について検討するため、過去200年間で感染症が大流行した年を『事故・災害 92年版』⁵⁾等から抽出し、同じ年に自然災害(地震災害)が発生していたかを『日本被害地震総覧』⁶⁾に基づいて整理した結果を表1に示す。

複合災害を「複数の災害に同時あるいは連続して被災して被害が拡大し、災害対応の困難性が増す災害事象」⁷⁾とした場合、1800年代以降においても、感染症の大流行中に地震災害が発生したケースを複数回確認することができる(表1の太字)。これらの複合災害の中から、今回は、感染症流行及び地震災害に関する資料が比較的に残されているスペイン風邪流行中の大町地震を検討の対象とすることとした。

(1) スペイン風邪の概要

スペイン風邪(Spanish flu)とは、1918年から1920年にかけて全世界で猛威を振るった新型インフルエンザ(H1N1型)の大流行(パンデミック)のことである。その感染者は約5億人以上、死者は5,000万人から1億人であり、当時の世界人口は約18億人~20億人と推定されているため、全人類の約3割近くがスペイン風邪に感染したことになる。

表1 地震災害と感染症流行の複合災害の事例

年	感染症	流行時期	死者数	地震	発生日	被害概要
1822	コレラ	8月～				
1858	コレラ	5月:長崎、 7月:江戸	(江戸だけで) 3万～10万	飛越地震 (M7.0～7.1)	4月9日	飛騨・越中・加賀・越前:飛騨北部・越中で被害が大きく、飛騨で潰家319、死203。
				信濃北西部(M5.7)	4月23日	大町組で家・蔵が潰れ、山崩れがあった。
1862	コレラ	夏	(江戸だけで) 7万3千			
1877	コレラ		8,027	太平洋沿岸	5月10日	チリのイキケ沖の地震による津波。波高は釜石で3mなど。函館などで被害。房総半島で死者があった。
1879	コレラ	3月～	105,786			
1882	コレラ	4月～	33,784	高知市付近	6月24日	市中で壁が落ち、板塀が倒れ、石灯籠の頭が落ちるなどの被害があった。
1885	コレラ		9,329			
1886	コレラ	夏～秋	108,405	信越国境(M5.3)	7月23日	家屋倒壊、道路・石垣破損、山崩れなどの小被害。
1890	コレラ	8月～	35,227	犀川流域(M6.2)	1月7日	東筑摩・北安曇・更科・土水内の各郡で家屋の小破、山崩れ、道路破損などがあった。
				三宅島付近(M6.8)	4月16日	三宅島で海岸が崩れ、道路を埋め、亀裂を生じた。
1892	天然痘	1月	8,409	東京湾北部(M6.2)	6月3日	東京で家屋破損5、土蔵破損24、煙突崩壊2。
1895	コレラ	5～12月	40,154	霞ヶ浦付近(M7.2)	1月18日	北海道・四国・中国の一部まで地震を感じた。被害範囲は関東東半分。全壊47、死9。
				熊本(M6.3)	8月27日	阿蘇郡山西村で家屋・土蔵破損400。
1902	コレラ	8月～	8,012	三戸地方(M7.0)	1月30日	三戸・七戸・八戸などで倒壊家屋3、死1。
1916	コレラ	7月	7,482	愛媛県宇摩郡関川村	8月6日	傷1、落石あり。
1918	スペイン風邪	10月～	266,479	大町地震(M6.5)	11月11日	被害があったのは大町及び付近の村で、家屋全壊6、半壊破損2852、非住家全壊16。
1919		12月～				
1946	発疹チフス		6,940	南海地震(M8.0)	12月21日	死1,330、傷2,632、不明102、家屋全壊1万1,591、半壊2万3,287、流失1,451、焼失2,598。
1957	アジア風邪		5,700	新島近海(M6.0)	11月11日	新島・式根島で石造家屋に被害があった。

日本では、1918年秋～1919年春の流行(前流行)及び1919年冬～1920年春の流行(後流行)により、国民の4割(2,380万人)が感染し、39～45万人(前流行:約26万人、後流行:18万人)が死亡したと推計⁷⁾されている(1918年当時の日本の総人口:約5,808万人)。また、長野県においては、前流行で7,980人、後流行で4,873人、計12,853人が死亡したと推計⁷⁾されている(1918年当時の長野県の総人口:約156万人)。

(2) 大町地震の概要

大町地震は、糸魚川ー静岡構造線断層帯沿いの長野県の北西部に位置する大町市の付近で発生した地震である。1918年11月11日の2時58分と16時3分に、それぞれM6.1の地震(前震)とM6.5の地震(本震)が発生した。

これらの地震による建物被害としては、住居全壊6棟、半壊305棟、破損2,547棟である。これらの被害は、大町(現在の大町市中心地区・大町地区)及びその周辺の常盤村(現在の大町市大字常盤)、社村(現在の大町市大字社)、平村(現在の大町市大字平)、陸郷村(1957年に池田町、明科町(現・安曇野市)、生坂村に解体分割)の1町4村に集中している(図1)。その他の被害としては、石垣被害334箇所、道路崩壊・亀裂延長1,507間(約2.7km)、河川その他決壊・亀裂延長3,344間(約6km)である。

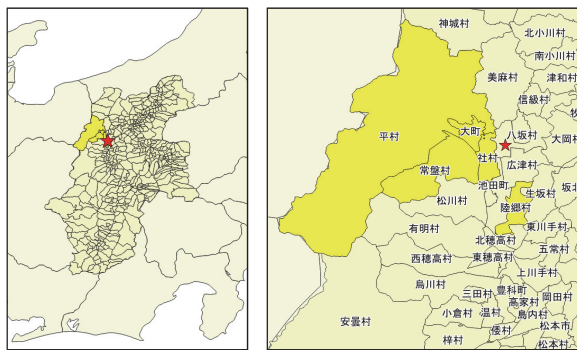


図1 大町地震の震源(★印)と被災町村

3. 新聞記事を用いた調査・分析

長野県でのスペイン風邪の罹患者に関する記事は、『信濃毎日新聞』の「長商にも力士病⁽¹⁾」と題する記事(10月23日)が初出⁷⁾である。そこで、県立長野図書館において、『信濃毎日新聞』の新聞記事を用いて、1918年10月23日から1年間の記事の見出しから、スペイン風邪及び大町地震に関する記事を抽出した。以下では、これらの記事に基づいて、まず、スペイン風邪による長野県内の被害の様相を示し、つぎに、スペイン風邪の流行中に大町地震が発生した被災地(大町)での被害の様相を示す。

(1) スペイン風邪による被害の様相

スペイン風邪による長野県内における被害の様相に関する記事を、組織・業種ごとにまとめた結果を表2に示す。学校においては、修学旅行の際、生徒・教員が集団で感染した事例があった。また、欠席する児童・生徒の増加に伴い、臨時休校(数日～10日間程度)の措置が取られていた。病院では、外来患者の増加に加えて、医師・看護師も感染したため、診療に支障を生じている事例があった。議会・軍隊・警察などでは、欠勤する者が多くなったため、それぞれの業務で支障を生じていた。工場でも、工員の欠勤者が多くなり、休業せざるを得ず、これに伴い生産額が減少していた。薬局・氷屋・葬儀屋といった患者・病死者に関係する業種が繁盛した一方で、旅人宿・銭湯屋など不特定多数の者が集まる業種では客が少なくなり営業不振となっていた。

なお、長野県内でのスペイン風邪の流行期間は、「陸軍の感冒」(1月13日付)と題する記事の中で「流行性感冒は近來漸く沈静に帰し我が陸軍各部隊に於いても該患者は著しく減退せる模様あり…」との記述から、10月下旬から1月上旬までの約2ヶ月間続いていたと推察される。

(2) スペイン風邪と大町地震の複合災害による被害の様相

スペイン風邪流行中の大町地震の被災地(大町)における被害の様相に関する記事を、時系列でまとめた結果を表3に示す。大町におけるスペイン風邪の罹患者に関する記事は、「大町の力士病」(10月29日付)と題する記事が

表2 スペイン風邪による長野県内における被害の様相

組織・業種	被害の様相
学校	修学旅行先での感染(西春近村小学校:伊勢への参拝中に児童46名中約40名と教員10名中7名が感染[10/26])。10月下旬に1校あたり児童・生徒数十名～数百名が欠席(松本商業学校:520名中263名が欠席[10/30]、松本中学校:700名中250名が欠席[10/30])。11月上旬に数日～10日程度の臨時休校(長野師範学校:欠席者が全校生徒の5分の1に達し、2日から6日まで5日間の休校[11/2]、松本市内の全学校が休校[11/3]、飯山小学校:全校の3分の1が欠席のため29日より休校中、生徒1名が死亡[11/3])。
議会	大町:町議会の総議員18名のうち出席4・5名のため、議会が不成立・流会[11/8]。
軍隊	歩兵第44聯隊の1,500名が感染、11月初旬に徳島で行われる演習に不参加[10/29]。
警察	受付が全員感染したため、下諏訪派出所からの応援で事務を行う[10/27]。
警察学校	巡査教習所の罹患者が約50名に達し、25日の出席者10名のため教習を中止し、教習所を閉鎖[10/26]。
病院	外来患者の増加(長野赤十字病院:入院患者200名[10/25]、患者数は平静の2～3倍[10/26])。岡谷地方の医師が薬瓶を牛乳配達で配達[11/8]。医師の感染(大下條村:村内の医者4人が感染したため、患者はやむを得ず草を採って煎じて飲む[11/18])。
薬局	薬の品不足(アスピリンの高騰[11/6]、平静の3倍の売れ行き[11/10])。
郵便局	長野郵便局:多数の欠勤者により通信業務に支障[10/26]。松本郵便局:電話交換手69名、吏員15名、集配人23名が感染[11/4]。交換手が感染を恐れて出社せず自宅で引きこもり[11/28]。
鉄道	列車の運行に支障(車掌20名が感染[10/27]、長野運輸事務所:254名の患者が発生[11/3])。
工場	工員の感染により休業(長窪古町金丸製糸場:ほぼ全女工が感染[10/28]、森村瀧澤製糸場:58名中30名の女工が感染、27日より休業[11/1]、列車工場:工場員500数名中220名が感染[11/3]、岡谷地方の製糸工場:1工場で死亡者6名[11/8])。生産額の減少(岡谷地方の生糸の生産額が先月に比べて3割5分の減少[11/15])。
製氷屋	伊那町:氷の品切れのため、他所から取り寄せ[11/9]、長野市:氷の値段の高騰[11/10]。
旅人宿	家人が罹患したため宿泊客を断らざるを得ない状況[10/28]。修学旅行の申し込みがキャンセル[11/6]。
銭湯屋	松本市の銭湯では入浴者が減少したため不景気[10/30]。
遊郭	娼妓約100人が感染[10/26]。芸妓60名中半数が呻っている[10/27]。女将の死亡[10/30]。
葬儀屋	死亡者が激増し、火葬場が大繁盛[11/1]。多数の死亡者のため火葬場で焼ききれない[11/16]。

[]:新聞の日付

初出であった。それ以降、大町の小・中学校での児童・生徒の欠席や休校、大町議会において出席議員が少なく定数不足のため流会といった記事が続く。このように大町においてスペイン風邪が広まりつつある状況の中で、11月11日に大町地震が発生した。まず、2時58分に発生したM6.1の地震(前震)では、電灯が消え、しばらく激しく揺れ、歩くことができなかった⁸⁾。その約13時間後の16時3分にM6.5の地震(本震)が発生し、このときの揺れによって、数百個の建家が半壊した⁸⁾。

表3によれば、地震発生の直後から、ほとんどの住民が、屋外(街路、田圃など)に戸・屏風・畳などで仮小屋を作り、6～7軒共同での避難生活を始めた。インフル患者は、家人に助けられながら避難をすることとなり、その中には避難中に容態が急変して死亡した者もいたようである。また、警察によって火気の使用が禁止され、かつ、14日未明からの降雨により、寒さに耐えざるを得ない環境に置かれた。さらに、地震の揺れによって病院・薬局の薬瓶が壊れたため、インフル患者への投薬が困難な状況に陥った。そして、頻発する余震に対する不安から、大町から松本市へと移動する避難者も現れた。

このような状況の中、地震学者の大森房吉博士が大町を訪れ、現地視察を行う⁹⁾とともに、11月14日には住民のための講演会を開いた。講演の中で、今後の強震はないであろうとの見解が述べられ、これを聞いた住民は安堵し、仮小屋から自宅へと戻り始めた。このため、屋外の仮小屋での避難生活は、結果的に数日から1週間程度で済んだようである。

(3) 考察

以上より、スペイン風邪が流行しつつある状況下における大町地震の被災地(大町)での被害の様相から、地震災害と感染症流行の複合災害時のリスクとして、避難に伴う患者の重症化、劣悪な衛生環境や医療体制の機能低下に伴う患者数の増加、共同での避難生活や他地域への移動に伴う感染機会の増大があり得ることを確認することができた。

『新型インフルエンザ等対策政府行動計画』では、国民の生命及び健康に著しく重大な被害を与えるおそれが

ある新型インフルエンザ等への対策として、「不要不急の外出の自粛要請」、「学校等の使用制限の要請」などを行う必要があるとしている。将来、新型インフルエンザが蔓延する中で地震災害が発生した場合、家屋の被害等により在宅療養が困難な患者が多数発生し、学校等に避難せざるを得ない状況となり、ヒト→ヒト感染の機会が増加するといった問題が生じることが懸念される。これらの問題を顕在化させないための方策の一つとして、地震発生後に在宅療養できる体制を整えておくことが考えられる。東京都では、大震災に備えて「在宅避難」¹⁰⁾を推奨しているが、自然災害と感染症流行の複合災害への備えとしても、「在宅避難」できるように準備を整えておくことは、感染症から国民の生命及び健康を保護するとともに感染拡大を抑制するためにも有効であると考えられる。

4. まとめ

本研究では、自然災害と感染症流行の複合災害時の被災イメージを得ることを目的として、1918年の大町地震とスペイン風邪の複合災害時の長野県大町における被害の様相を、当時の新聞記事を用いて調査・分析した。その結果から、将来の自然災害と感染症流行の複合災害時への備えとして、国民の生命及び健康の保護及び感染拡大の抑制のためには、「在宅避難」が有効な方策の一つとして考えられることを示した。

補注

- (1) 1918年4月に台湾巡業中の力士3人が病死し、その後も休場者が続出したことから、スペイン風邪は当初「力士病」「相撲風邪」と呼ばれた。

参考文献

- 1) 中林一樹・小田切利栄:日本における複合災害および広域巨大災害への自治体対応の現状と課題,地域安全学会論文集,第11巻,pp.33-42,2009.
- 2) 菅又昌実・山折潤子・矢野一好:大規模自然災害時における衛生水準の低下と二次災害としての感染症発生について—特に飲料水の安全性確保維持の重要性について—,都市科学研究,第1号,pp.63-70,2007.
- 3) 関谷直也:15-8 感染症,災害情報学事典(日本災害情報学会)

- 編), 朝倉書店, 2016.
- 4) 内閣官房: 新型インフルエンザ等対策政府行動計画; https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ful/keikaku/pdf/h29_koudou.pdf (閲覧 2018 年 3 月 17 日)
- 5) 溝川徳二編: 事故・災害 92 年版, 教育社, 1992.
- 6) 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子: 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会, 2013.

- 7) 速水融: 日本を襲ったスペイン・インフルエンザ—人類とウイルスの第一次世界戦争—, 藤原書店, 2006.
- 8) 大町市史編纂委員会: 震災・大町地震, 大町市史(第四巻 近代・現代), pp.871-877, 1985.
- 9) 大森房吉: 信州大町地方の地震に就きて, 地学雑誌, 31 巻, 1号, pp.1-16, 1919.
- 10) 東京都: 防災ブック「東京防災」, p.54, 2016.

表 3 スペイン風邪と大町地震の複合災害による長野県大町における被害の様相

日付	被害の様相	
	記事(意識)	記事(原文)
10月29日	大町にもインフルが侵入し、感染者が出ている(特に花柳界の芸妓に多い)。／小・中学校でも予防に努めている。	北安曇郡大町へも力士病流行性感冒侵入し近ごろ各所に発熱して臥床する者あり殊に花柳界芸妓連中に多くありて抱主は何れも零し居る模様なり尚先頃東京方面に流行せる同地／女校生にも帰宅早々発熱して病床中の者あれば小学校中学校にも相当予防警戒し居れり
10月31日	大町中学校では、各学年で十数名の欠席者、寄宿舎で約20名の患者。学校の規則で、ストーブの使用は12月から。	大町中学校にも感冒襲い生徒の欠席する者各級に十数名宛を生じ寄宿舎にも目下二十餘名の患者を出し蔓延の兆あるが学校の規則なりとて追々寒気は劇しきも寄宿舎にストーブを据えるは十二月なりと云う
11月6日	大町・池田町の市街地でのインフルは猛威を振るうほどではないが、罹患者は増加傾向にあり、大町でも4日、病死者が出た。	北安曇郡大町及び池田町の市街地に於ける悪性感冒は各自の警戒に猖獗と云う程にもあらねど漸次罹病者を増す悪傾向にて四日は遂に大町に於いて病死者を出すに至れり
11月8日	大町議会では、4日、議員総数18名のうち4～5名のみ出席のため流会。5日も開催できず。6日18時半ごろ、10人の議員が出席・開催できた。	北安曇郡大町に於いては警察署敷地買収及び之に附随せる問題並びに追加予算の為四日町会を召集したるが悪感冒が祟って却々集まらない何度かの電話や使いやで午後五時頃迄に集まった者漸くにして四五人総員十八人の議員が僅かに四五人では根づから埒があかない遂に流会と成つて翌五日は午前九時開会と早朝から小僧を廻して狩立てたが矢張り駄目午後六時に及んで前日と同じ成績再告知の機問もあれど問題が問題なれば成るべく再告知に依らず議決したいと曾根原町長君の希望「六日は是非済ましたいから顔丈でも出して呉れ」と云うことになって六日の午後六時半頃漸くのこと十人を狩出し茲に始めて原案通り可決確定
11月9日	北安曇郡におけるインフルは、市街地から山間部に広がり、小学校は臨時休業。	北安曇郡内に於ける流行性感冒は市街地より漸次山間部部落に侵入し七貴及び陸郷村南各小学校臨時休業をなすに至り神城小学校に於いても七日迄に患者四十名の多数に及べり之れ亦休業の運びに至る
11月12日	火の使用が禁止された。／ほとんどの町民は屋外に戸・畳を敷いて避難。／インフル患者は、家人に助けられながら避難。／大町郵便局では、仮小屋に交換機を運び込み、通話・電信を再開。／道路の中央には警戒のため1戸あたり1名が居残る。／大町は真つ暗の状態。役場・警察署の職員が不在。	町内は勿論附近村落に手分けにて出張火を焚く事を厳禁するなど／町民は殆ど全部屋外に出で街路戸や畳を敷きて座し居り／例の風邪に冒された人が家人に助けられて喰り喰り避難せるものもありたり／大震動にて通信機懸を失いたる大町郵便局長は色を失いたる局員を督促して町中に天幕を張りて小屋を掛け殆ど生命懸けて交換機をそれに引入れ幸うじて通話を開始するに至りこれと同時に電信も通ずるに至れりされど単に局と他地区との通話に止まり市内電話は一も通ずる能わず仮令通ずるとしても半壊となりたる家及び壁土の剥げ落ちる屋内には居る事能わざれば通話し得ず／町民の殆ど全部寒風吹き頻り寒く雪をも飛ばす中を子を抱き老を助けて思い思いに何処かへ避難し去るもの多く街路の中央には一戸一名位が警戒の爲居残る位の有様／震災の大町は更に暗黒の大町となり一時奔走し居りたる役場員等も其後は何れに行きたるか其姿も見えず警察署員も又警戒に出でたるまま其の多くは散り散りとなりて連絡保たれず
11月13日	ほとんどの町民が屋外で避難。／住民が屋外で避難しているため、郵便・電信の配達に困難。／大町では、地震による負傷者はいないが、病院・薬局の薬棚が倒れ、薬ビンが壊れたり、薬が混ざったりして、患者への投薬が困難。／多数の患者の中には、避難中に容態が急変し、死亡した者あり。／避難者は、雪が降る中、寒さに耐えながら一夜を明かす。／停電のため精米できない(大町では電気ではなく、水車で精米)。／避難民の間に「今から何時後に大地震がある」「大町一帯は地盤が陥没して海となる」との流言が広がる。	町民は全部今尚戸外に避難中なり／郵便及び電信は山の如く配達夫は懸命になり奔走し居れ共而も住民何れも避難して戸外にある事とて受取人を捜す能わず／避難民中流行性感冒に苦しむものあれども医師や薬局薬種屋の戸棚等何れも震動のため或いは破壊し或いは混交したため何れが劇薬か毒薬か更に判明せざるより投薬する事叶わず患者は徒に高熱に苦しむの惨状を呈し居れり／大町にては医者や薬種屋薬種屋薬種屋等減茶減茶となりたるより薬品が欠乏したる結果大病人急病人を抱えたる人々は閉口し居り地震にて直接の負傷者等は見当たらずとも流行性感冒のため病人続出の有様なり／多数の流行感冒患者中には地震の爲に避難中に容態急変して死亡したる者もあると云う／多くの避難民は思い思いの場所に陣取りチラチラ降る雪の中にガタガタ震えながら不安の夜を明かした／大町地方は震災の爲米が不足せり右は同地が水車によらず電気精米をなし居りより電力不通となりたる結果精米も不能となりたる関係なり／避難民中に『今より何時間目には大地震あり』とか「大町一帯は地盤陥没して海となるべし」などの流言伝わり警察署にては所々に張札をなして其無根なる事を論し居れ共迷信深き町民は容易に之を信ぜず
11月14日	大町の町民は13日夜も仮小屋で避難。／13日20時頃、大町新町近くの仮小屋に「20時半ごろ地震がある」との流言を告げる者あり。／パニックとなった多くの町民が警察署に殺到する。／大町から松本へ避難者が移動。／避難中にスペインインフルエンザに罹患する者あり。／町民は、街路・田圃で屏風や蚕ごで小屋を作り、6～7軒が共同で避難。	大町町民は十三日夜も皆仮小屋の中に蠅燭を灯し警戒なりなき折柄午後八時頃大町荒町附近の仮小屋へ同夜八時半強震あるべしと言ひふらせる者あり一同は大恐慌を來したし警察署前は忽ちにして人の山となり其模様を聞かんとせりより署員は声を喝して中村技師の発表を説明して帰宅せしめし／大町から松本へ來たる避難民は非常なもので子供、老人、病人、学生なども引き揚げて來るのが多く寄宿箱の者なども命あっての物種とばかり松本市へ流れ込んで來る／避難中感冒に罹るもの続々あり天幕内に医師を招きて夫々治療の途を講じ居れり／町民は全部街路又は田圃に屏風或いは藁藁を以て小屋を作り六七軒共同にて避難し
11月15日	大町付近は、14日3時から降雨となり、仮小屋で避難中の者は漏水により全身が濡れる。／大森博士の講演を聴いた住民は、安堵して帰宅した。／大森博士らから、今後の地震の見通しを聴いた住民が安心して、雨に耐えかねて仮小屋から自宅に戻る者も見受けられる。／住民は、大町地震の他に、雨と寒さ、スペインインフルエンザの三重苦の攻撃を受けている。	大町附近は十四日午前三時より降雨となりたれば掛小屋よりは盛んに漏れし戸外に避難せる町民は濡れ鼠となりたり／大森博士の講演は午後七時に始まり地震の原理より説き起し今回の大地震に就いて詳細なる講演あり最後に今後怖るるに足らずと云う意味の講演ありて閉会せるが聴衆は何れも安堵の色を現して帰宅せり／中村学士大森博士の今後決して強震なかるべしとの発表に多少の慰安を得し町民は驟突く雨に耐えかねて十四日夜は仮小屋より本宅へ引越しを為せるもの諸所に見受く／手取り早く云えば、彼等は地震からする大苦難に苦しめらるる他に、ふりきる雨と寒威、及び世界中を暴れ廻る悪感冒、都合三個の魔手之為、包圍攻撃を受けつのである。
11月16日	電力会社から電力の供給が行われ精米ができるように。薬の品不足もほぼ解消。食料の不足も問題なし。／インフルは沈静時期のため患者も少なく軽症にとどまる。	大町警察署大町役場協力して安曇電燈会社より電流の供給を円滑ならしめ精米業者を督促し白米には当分差し支えなき程度に漕ぎ付けと隣保団結相互救済の美を上げ居れば聊かも心配無し又川村技師は大町に於ける薬種商全部に就き調査をなせるが丁機類は幾分被害あり不足の物あるも総ての薬品は毫も不足を告げず当分供給に差し支えなき由なり／今回の災害は火災と異なり小屋掛材料もあり食料の欠乏も杞憂に過ぎたる風説に止まり充分供給されつあり又衣服も家屋より取り出し來たり不足を感ぜず又流行性の感冒も目下沈静時期にて患者も少なく且つ軽症にて赤十字救護班の活動にて十分なるため
11月18日	警察の指示により避難民は仮小屋から自宅に移る(居住不能な者だけ仮小屋で引き続き居住)。	避難民は十七日警察署の注意に依り仮小屋より本宅に引き移りを為せるが居住絶対不能のものは矢張り仮小屋に居住を継続しつあり
11月20日	余震が減少しているため町民は安心し、通常の生活に戻る。／道路の仮小屋は、住家の修理が進み、ほとんど撤去された。	震動は漸次減少したるを以て町民は漸く愁眉を開き人心全く平穩に帰し各自常務に服するに至れり／大町表通り街路に当たる仮小屋の如きも住家の修理完成し比較的日子を要するもの小屋掛四箇を除くのみとなり他は全部撤去されたり
12月5日	地震封じのための地鎮祭が執り行われた。式の最中に余震が発生。	地震封じの爲の北安曇神職主催地鎮祭 式の真最中大きくガタガタ／式を進めて行く程に午後一時頃稍強いのがミシミンと來た